

---

# **世界の救い方**

浅井 純

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の救い方

### 【Zコード】

Z9984H

### 【作者名】

浅井 純

### 【あらすじ】

その少女は“エーテンの森”の主だった。少女は森の主であり、森の動物とも話ができる。いつもと同じように森の動物達と一緒に朝ごはんの支度をしていると、その少女がとても信頼している猫『ルアナ』が突然気を失い、倒れた。ルアナは気を失う前に、森の奥のさらに奥にある谷で何かを見たという。気を失った理由を知るために、少女はその谷へと行く。そこで少女が見たものとは……？

## 第一話

人があまり近づかない森…“エーテンの森”に一人の少女が住んでいた。

その“エーテンの森”には果物や木の実などが豊富だった  
ので、少女はその果物や木の実などで生活をしていた。

人が森へ近づかない理由…それは“エーテンの森”ではなく、少女  
が森にいるから近づかないだけだったのだ。その少女は『呪いの少  
女』…その少女に近づいた者は絶対次の満月には姿を消す。そう  
ゆう事件が起こっているのだ。こんな説もある…

【あの森に住んでいる少女に近づけば、変な呪文を唱え攻撃してく  
る】

という説だ。少女の正体とは…

鳥の鳴き声がする。窓からは眩しい光が部屋へと入ってくる。

「もう朝か…。」

一人の少女は布団から起き上がり言つた。するとギシギシと床の音  
を立て、少女はドアを開け伸びをした。すると少女は口に手を当て、  
ピーと口笛をした。

「ルアナ…！ ルアナいる…？」

少女は森へと叫んだ。すると木がガサガサと揺れはじめた。

「こんな朝っぱらから何だよー」

一匹の黒猫が言つた。この黒猫は喋れるのだ。だが、この黒猫の言  
葉は少女しかわからないのだ。“エーテンの森”的下にある村の人  
々に黒猫が言つても、皆首を傾げる。

「ちょっと皆を呼んでほしいの一あ、あと大きな動物か生き物探し  
てきてちょうだい！」

少女は黒猫にそう叫んだ。

「もう… ジュリアは人遣い荒すぎなんだよーー！」

ルアナという黒猫は呆れたように言い、少女…ジュリアの言ったことをしていた。

「ごめーん、あと不思議な動物いたら教えてねつ」

ジュリアはルアナのやることに、一つ付け足した。ルアナは、はあとため息をつき森の奥へと言つた。

「さて、材料集めしなきゃ… イール！！ ちょっと手伝つてーー！」

ジュリアは誰かを呼ぶように言つた。するとジュリアの所に一匹の狼がやってきた。

「今度の褒美はなんだ??」

またもや動物が喋つた。この“ヒーデンの森”は全ての動物と少女は話せるようだ。一匹の狼の名はイールというらしい。

「それは仕事が終わつてからね… 何か燃やせるものを持ってきて」

ジュリアはイールと目線を合わせ、そう言つた。

「はいはい。仲間も連れてくるけどいいよな！」

イールは振り返り、ジュリアに言葉を投げ捨てた。

「まあその分あたしが得だけど」

ジュリアは笑顔でイールに手を振つた。

本当にこここの森の子は賢いわね… おかげでとっても助かる…。

「さて、果物でも取つてくるかーー！」

ジュリアはスツと立ち上がり、空を見上げながら言つた。ジュリアは一步一歩歩きだした。すると、ルアナがジュリアに飛びついて来た。

「ちよつ…ルアナ？？皆呼んできたの？」

ジュリアは驚きながらルアナに言つた。

ルアナの様子がおかしい…体中ガタガタに震えてる…。

「ジュ…ジュリア…森の奥深く…に…」

ルアナは言つてる途中に意識を失つた。

「ルアナ！？？森の奥深くに何がいたの？ルアナ…！！」

ジユリアはルアナを揺さぶりながら言った。

「ダメだ… 意識失ってる… 寝かせておくか… また起きたら話してくれるかな? にしても… 森の奥深く… 果物の収穫がてら言つてみるか…」

「皆! ! 聞いてーー ルアナが寝てるから、静かにしてあげて! ! あと、ちょっとあたし出掛けてくるから、家を見張つて! ! お願ひ! !」

ジユリアは森に向つて叫んだ。すると森から、

「任せで! !」

と大勢の声が返つてきた。ジユリアはホッとし、森へと向かつた。

「まだ奥かしら? 案外遠くまで行つたのね」

ジユリアは周りを見ながら言つた。

「もしかして… 谷? ? でもあそこは言つちゃダメだつて前言つてたし…」

ジユリアは心配そうに言つた。果物を一個も採らず、ただただ前に足を進めて行つた。谷… そこは凶暴な獸がいるといつ言い伝えが昔からある。

もしかしてルアナ… その獸を見たのかも…。

「とにかく行かなくちゃ始まらない! !」

ジユリアは急いでその谷へ走つた。周囲にある果物などは全て走つているときは関係なかつた。そして森の奥にある谷へと来た。そこでジユリアが目にしたのは… 空想の生き物のはずの獸… いや、あれは… 大きな翼… 大きな角… エメラルドみたいな綺麗な緑色の体… あんな姿をした獸… あの名前しか浮かんでこない。

“ドラゴン”

そこには全長12㍍ぐらいの“ドラゴン”といつ召の空想の世界の中にはいるはずの生き物がその谷に眠つていました。

これは… これはルアナが意識を失う理由が… ようやくわかった。ルアナはこのドラゴンを見たんだ。見つけてしまつたんだ。しかし… このドラゴンどこからやつてきた? 飛べるのは分かつている…。

「どうしよう、このドラゴンが夢から覚めたら… この“ヒーテンの

森”がこのドラゴンが壊しちゃうかも……」

ジュリアは思わず大声で叫んでしまった。ジュリアは急いでドラゴンがいる方に目を向けた。

よかつた…ドラゴンはまだ眠っている…。こんなドラゴンあたしの『力』じゃ無理だと思うし…かと言つて、あたしの『力』を全開にして解き放つたら、間違いなくドラゴンは死ぬ。ドラゴンを殺してしまつ…これは最も大きな罪を犯すことになる。でも…それでもこの森を守りたい！この森は何年も守ってきたんだ！！罪を犯しても…それがあたしの命を失つても…この森はあたしが守るんだ！！！

「「めんね。みんな、ルアナ…」「めんね。あたし大きな罪を犯しちやう。けど、森は大丈夫だから…森は必ず…必ずあたしが守つてみせるっ！」

ジュリアは両手の指を絡ませ、おでこに当てながら言つた。

ジュリアは目を閉じた。心を落ち着かせ力を手の一点に集中させた。そしてジュリアの身体は黄色い眩しい光とともに輝いていた。そして…

「我が力よつ！！！！主の願い…聞きとどけよ…！」

ジュリアはカツとなり両目を開いた。

その瞬間ドラゴンも両目を開けた。ドラゴンはジュリアを見つめていた。

ジュリアはその事に気付かず、力をドラゴンへ向けた。すると、ドラゴンはうめき声をあげた。その衝撃波にジュリアは地面へと呑きつかれた。ドラゴンはジュリアの攻撃を跳ね返したというのだ。

「このドラゴン…聞いていないだと！？？」

ジュリアのおだやかな表情とともに性格が変わった。

ドラゴンはジュリアを睨んでいた。その気迫はいまにも後ろに弾き飛ばされそうな威圧感がドラゴンとジュリアの間には流れていた。ジュリアは思わず唾をゴクリと飲み込んだ。こんなはずではなかつた。こんな予測なんてしていなかつた。ジュリアは足をフラつかせ、

もう一度両手の指を絡ませ、

「我が力よ…ドラゴンのもとへ連れてゆけ」

ジュリアはそう自分の力に命令をした。するとジュリアの身体は宙に浮き、ドラゴンのもとへとジュリアは近づいていた。

ドラゴンは警戒しながらも、ジュリアを睨み続けていた。どうやら、ドラゴンはジュリアが普通の人間ではないと分かつたらしい。

ジュリアはドラゴンの瞳をじっと見つめた。ドラゴンの瞳は綺麗なサファイアの宝石みたいな瞳をしている。思わず見惚れてしまふほどに…。

「お前に仲間はいるのか？」

ジュリアはドラゴンに問う。ジュリアは哀しい表情を浮かべた。それはどこか可哀想で思わずこいつも哀しくなつてきそうな表情だった。

ドラゴンはジュリアを睨まずじつと見つめていた。するとドラゴンが、

「そんな者いない。この世には我しかいないのだ。」

ドラゴンは喋った。ドラゴンの声は女の声がした。このドラゴンはのようだ。

「やうか…なら、私の仲間にならないか？他に行ぐといふがないのなら…」

ジュリアは優しい声でドラゴンに言つた。

すると、ドラゴンは少し考えている様子だった。こんな人間に簡単にについていつてもいいのか…こんなに簡単に信用していいのか…。裏切られたらどうする？その事ばかり考えていた。

ジュリアはそんなドラゴンを見て、

「信じられないのなら、信じなくてもいい。でも、一人は寂しいよ？」

普通の心優しいジュリアに戻っていた。

どうやら、ジュリアはこのドラゴンが心配のようだ。一人で過ごしていると、人間に姿が見つかりとても辛いかもしない。

だが、ドラゴンはジュリアの心配を無視し、

「…私は寂しいなど思つたことはない。余計な気遣いだ。人間よ」  
ドラゴンはジユリアを見つめ、言った。

「そう…じゃあ、寂しくないという心をまだ知らないだけなのかも  
しないの…私もこの森で一人、寂しいなんて思つたこと無かつた。  
これが普通だつて。でも、この森の鳥や動物や皆が私に話してくれ  
たり、何かしてくれたから今だつて寂しくないの。むしろ、今昔の  
自分を思うと…どれだけ寂しかつたか…今なら分かるの。だから…」  
ジユリアはドラゴンに一步ずつ歩み寄つた。

するとドラゴンは怒りを隠しきれずにジユリアに言い放つた。

「黙れ……………人間などと一緒にするな  
っ！！！！！我はドラゴン…貴様は人間だ！！！人間と同じ感情を  
持つてゐるみたいな事を言いよつて…感情など我がヴィーンにはい  
らぬっ！！！！！人間よ！！我のいる場から去れっ！！！」

ドラゴンはさつきのように声を上げ、衝撃波をジユリアにあびさせ  
た。

ジユリアは空高くへ飛んだ。

ジユリアもこのドラゴンの言葉には怒りを抑えられず、

「私が人間だと言つのか…おろかなドラゴンよつ！！！！！」  
またジユリアの優しい心がガラリと表情と共に変わつた。しかし、  
さつきとは違う雰囲気を漂わせていた。ジユリアの心には怒りと心  
配が混ざつてゐるからだ。

「こつちも言わせてもらつが、あんな醜き人間と私を一緒にするだ  
と…？ふざけるなっ！！！！！」

ジユリアは空中で自分の力を手に集中させ、ドラゴンに攻撃をした。  
その力はさつきとはまた違ひ強力な力だつた。しかも、攻撃の前に  
変な呪文を唱えていた。

この力にドラゴンはサファイアみたいな綺麗な瞳を大きく開けた。  
さつきみたいに衝撃波を出しても跳ね返りはしなかつた。

「貴様！！！今なにをつ！？」

ドラゴンは攻撃を喰らう前にその一言を発した。

「ちょっとした怒りの魔法みたいなものよ、これだけは使わないと  
思つてたけど」

ジュリアはドラゴン…いや、ヴィーンを睨みながら言った。  
このヴィーンとこのドラゴン…少し可哀想なドラゴンかもしない。  
でも…確かに感情は持つていると思う…その感情に気がづいてくれるかの問題ね。

ジュリアはドラゴンを見つめながら思つた。

すると、ヴィーンの声が聞こえてきた。まだ生きていたのだ。

「おのれ…貴様…いつたい何者だっ！！！人間を憎み、そして人間の感情をしつかり持つている…聞いたことどが無い…それにこの力はなんだ…」

ドラゴンはかなりのダメージを受けたようだつた。それもそうだ。  
あまりの驚きに、攻撃に抵抗しなかつたからだ。

「この“エーデンの森”的主…ジュリア、ただのちょっとした力を持つ魔法使いよ」

ジュリアはヴィーンを見下すように言つて、ヴィーンの元へと近づいた。ジュリアは傷ついたヴィーンの身体を見つめ、はあとため息をついた。

「ジュリア…か…まあ…すこしは信じてみるか。ジュリアという名の魔法使いよ。お前についていこう」

ドラゴンはフツと笑いながらジュリアにそう言つた。

ジュリアは表情がいつもどおりになり、その顔に笑顔を見せた。

「本当に…やつたやつた…皆にも知らせなくちゃねつ…えど、ヴィーン…あなたの住む場所はこの谷でいい？」

ジュリアは嬉しそうな笑顔でヴィーンに言つた。

「ああ。だが、この森は普通の森だろ？なぜ他の奴らはいない？」  
ヴィーンはジュリアに聞いた。

ジュリアは眉をピクリとさせ、ヴィーンに背を向け言つた。

「この森の主は私…他の人間共になんて渡さないわ」

ジュリアは手をぎゅっと握りしめ、歯を噛み締めながら言つた。

ヴィーンはクスッと笑った。

こんな人間もいるのだな…。いや、魔法使いと言つた方がジュリアにはよいか。まあ、魔法使いの人間が人間を憎むなど面白いことよ。「守るためか? ここに住人を…殺気が漂つていて」「

ヴィーンの感覚というの鋭かつた。

森からは何匹もの動物や鳥の殺気がヴィーンへと向けられていた。ジュリアとヴィーンが戦つているとき、ヴィーンの衝撃波やジュリアの力を察したのだろう。

「そりや注意深いもの。ここに住人は他の奴とは機能が違うしね」ジュリアはあははっと笑うながらヴィーンにやう言つた。

「でも大丈夫、ここに子はちゃんと分かっているもの! 今こうして耳を傾けてくれてるしねっ!!」

ジュリアは身体をくねくね回した。そのジュリアの一言で殺気がいつきに消えた。今の言葉を聞いて、ホッとでもしたのだろう。自分達を感じてる…と言つてるような言葉だから。そうやつてジュリアと皆はコハコニケーションを取つてゐる。

「まう。じゃあ、私はそのもの凄い主についてゆけばいいのだな…どんなに危険でもな。今は戦国時代みたいなものだ…。戦など当たり前だからな」

ヴィーンは体を丸め、寝る準備をして言つた。

「そうね! 戰うときはよろしくねっ!!」

ジュリアはあつさりと笑顔で言つた。これから起きたことなど今、ジュリアでは分からなかつたのだ。危険な戦いが待つてゐるかもしれないのに…

「フッ。お前にしてはいい度胸だ。まあ知らないだけかもしれないが。」

ヴィーンはそう言つて、寝息を立てた。

ジュリアにはその意味など全く分からなかつた。首を傾げて、自分の家へと向かつた。

「ヴィーンつて寝るのが早いのね

ジュリアはその事を一番に気にしていた。ドラゴンはあんな話の途中でんも遠慮なく寝れるなんて変わった生き物ね。とか思っていたりしていた。

朝日が窓の隙間から見えた。いつの間にか寝てしまったようだ。

昨日…魔法を使いはたしてしまったせいか…

「ん? 私なんで魔法使いはたしちやつたんだつけ? 人間にあれだけの魔法力を使わなくてもいいし…何か忘れてる気が…」

ジュリアは自分の布団を見てハツと気が付いた。

ルアナが寝ていたからだ。

そつか…私、ルアナが見てきたものに会いに…。

ジュリアはバツと顔をあげた。頭にある生き物の姿と名前が浮かんできた。

『ドラゴン』

ジュリアが見たドラゴンの姿とは、エメラルドみたいな色をした綺麗な身体…サファイアのように美しい瞳…一度見たみら見惚れてしまっぽどに綺麗なドラゴン…。

じゃ…なくつて…見惚れてる場合なんかじゃないんだつ…! 私ドラゴンに襲われて…じゃなくて、私が攻撃して…それでつ…反撃してきて…私なんで生きてるんだろう? だってドラゴンにやられたんだよ? 死んじやつてるはずじやん! まさかここに天国…? …でもない。ルアナがちゃんとそばにいる。

「とにかく、果物収穫しなきゃ…何も食べてないし…収穫がてら谷へ行こう!」

ジュリアは果物かごを腕にかけ、森奥深くの谷へと足を進めた。歩いても歩いても先の見えない道をただ歩くだけ…随分、歩いたようだ。

何なの…谷までこんなに距離あつたっけ…何か空が暗い…。

「だいぶ曇ってきたなあ。大雨降つてきちゃつたらどうしよう…」

ジュリアは空を見上げ、灰色の雲をじっと見つめていた。

こんなことしてると場合じゃない！一刻も早く思い出して、ドリゴンを見つけなきゃ… そうだよ… 早く見つけて思って出せば濡れずにすむかもしけない。

「急げ急げ～～！」

ジュリアはまたも、果物を探るのを忘れて全力疾走した。

今のジュリアは早く家に帰りたい！早く思い出したい！早くドリゴンに会いたい！この事ばかり心の中で叫んでいた。ジュリアは走った。息をはあはあと漏らしながらも、足を止めず、休まず走り切った。

そして … 谷へと着いた。

ジュリアは谷を見ながら呼吸を整え、地面へと腰をおろした。

「やつ …… やつと着いたー！！！！」

ジュリアは嬉しさのあまり、ここですることを一瞬忘れたが、またすぐに思い出した。ジュリアは休憩をすませ、谷をキョロキョロと見つめた。

あれ？ ドリゴンがいない… 名前呼べば来てくれるかな… でもどうしても思い出せない…。「魔力を使い果たすと良くないよ」と母親に言われた記憶があるが、こうゆう事だったとは… 私も甘かった。“良くない”とは次の日だるくなつたとか、そういうのかなとか前に思つてみたが、“記憶が無くなる”もしくは、“記憶を一時的に失う”と言つた方が正しいかもしれない。今はとにかくドリゴンの名前を思い出すしか…。

「ああっ…………！」

ジュリアは叫んだ。どうやら思い出したようだ。

「ヴィーン～ヴィーンいたら返事してつ～！」

ジュリアは灰色の空を見上げ叫んだ。その声は森にいる誰にも聞こえていた。

ジュリアは氣にせず、ドラゴンの名前を呼び続けた。何度も何度も…。

ジュリアの声がドラゴンの名前を呼ぶにつれて、かすれてゆく。それでもドラゴンは来ない…やはり夢…だったのかもしない。

本当に夢だったらバカみたい。こんなに叫んで誰もいない谷まで来て…。

すると、さっきまで灰色の空だったのが嘘のように太陽が指してきました。

「…晴れてきてる…」

ジュリアは眩しそうな目をしながら太陽を眺めていた。

すると…

「我的名を呼んだか？ジュリア」

すると、とても大人びた女性の声が森中に響き渡った。

ジュリアはそのサファイアみたいな綺麗な瞳を見てハツと思いだした。

「ヴィーン…やつぱり夢じやなかつたんだ…」

ジュリアはヴィーンから目を離さなかつた。

「どうした？我に何か用があつたんじやないのか？」

ヴィーンはジュリアに言つた。

そういうえば何しに来たんだつけ？走つてこの谷へ来て…なんか用があつたつけ？

ジュリアは考えたが、頭がぐるぐる回つたらしくビリでも良くなつたように、

「あ～もうこいやつ！何にもない！ただ呼んでみただけ！」

とジュリアは嘘をついた。

ヴィーンはジュリアの無邪気な笑顔を見て、呆れたよつ

「不思議だな。人間というものは。」

ヴィーンはまた谷の奥底へと帰つて行つた。

## 第一話（後書き）

ファンタジーなので、是非ファンタジー好きの人人がいたら、読んで頂けると嬉しいです。

しょーもない小説とか思いますが、  
お願いたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9984h/>

---

世界の救い方

2010年11月10日14時45分発行